

感謝の心をこめて

Challenge & Smile



平成29年7月25日

No. 17-198

株式会社 いよぎん地域経済研究センター

愛媛県内大学生の暮らしぶりについて

—勉強もアルバイトも！！堅実に楽しむキャンパスライフ—

株式会社いよぎん地域経済研究センター（略称IRC、社長 重松 栄治）では、このたび、県内大学生へのアンケート結果を取りまとめましたので、下記のとおりお知らせします。なお、詳細は2017年8月1日発行の「IRC Monthly」2017年8月号に掲載します。

記

【調査要旨】

- アンケートによる月間の収入総額の平均は、学生全体では10.2万円と、2009年の調査開始以来最高となった。また、貯蓄を除く月間支出総額の平均も、ファッション費や娯楽費がけん引し、8.5万円と過去最高額であった。
- 毎月の貯蓄額は昨年よりは減少したものの、「毎月貯蓄している」学生の割合は、自宅外生は70.1%と調査開始以来最も割合が高くなった。
- 現在アルバイトをしている学生の割合は、男性76.8%、女性88.7%と女性のほうが高く、一度もアルバイトをしたことのない学生は男性8.6%、女性4.2%と男性のほうが高かった。
- アルバイトをする理由は、「生活費の確保」や「生活に余裕をもたせるため」では男性の割合の方が高く、「旅行・自動車購入などの目的貯蓄」では女性の割合の方が高かった。
- 現在（もしくは直近）のアルバイトについては、勤務期間「1年以上」（46.9%）、勤務時間は週「11～20時間」（42.4%）、時給「800～850円未満」（33.1%）が最も多かった。
- アルバイトを「一度もしたことがない」と答えた学生にアルバイトをしない理由を尋ねたところ、「勉強との両立が難しいから」（24.1%）が最も高い割合を占めた。
- 現在アルバイトをしていない学生も、アルバイトを「探している」が33.3%、「探してはいないがやりたい」が41.3%と、7割に働く意欲がみられた。
- アルバイトは人間関係や社会のマナーなどを学べる場となっているが、生活リズムの乱れから学業との両立に悩む学生も多い。人手不足が進む昨今、学生と雇用者がwin-winの関係となるような環境づくりがより一層必要だろう。

以上

私たちはチャレンジします。みなさまの笑顔のために。

NEWS RELEASE

株式会社 伊予銀行 愛媛県松山市南堀端町1番地 〒790-8514 TEL(089) 941-1141

IRC では、県内大学生の暮らしぶりを把握するため 2009 年からアンケートを実施している。以下は本年の結果である。

アンケートの概要	
時 期	2017 年 4 月中旬～5 月上旬
対 象	愛媛大学法文学部・社会共創学部「地域産業論」、 法文学部「卒業演習」、「専門演習」 松山大学経営学部「地域産業論」、 経済学部「経済政策論Ⅰ」の受講生
方 法	アンケート用紙を配付し、 その場もしくは後日回収。無記名方式。
回答者数	437 人

回答者属性

大 学	愛媛大学	41.6%	松山大学	58.4%
性 別	男性	50.9%	女性	49.1%
学 年	1 回生	0.2%	2 回生	52.7%
	3 回生	37.9%	4 回生	7.9%
	その他	1.4%		
出身地	愛媛県内	64.1%	四国3県	15.3%
	中国・九州	16.2%	近畿	1.2%
	関東	1.6%	その他	1.6%
住まい	自宅	45.1%	自宅外	54.9%

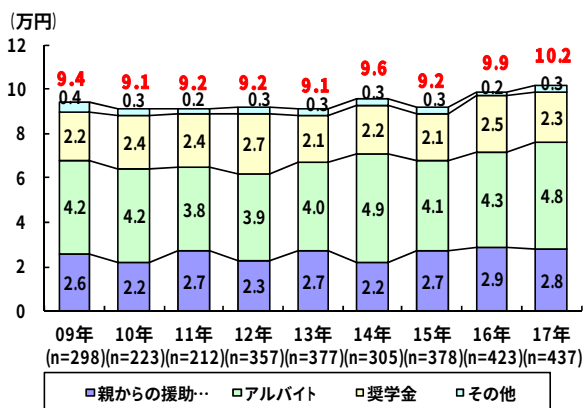
注：小数点以下第 2 位を四捨五入して表記しているため、内訳の合計が 100%にならないことがある（以下、同じ）。

1. 月間の収支状況

（1）収入状況 ～アルバイト収入が増加～

収入総額は 2009 年に調査を開始して以来、過去最高の 10.2 万円となった。収入総額の内訳をみると、親からの援助（小遣い・仕送り等）が 2.8 万円、アルバイト収入 4.8 万円、奨学金 2.3 万円であった。アルバイト収入が前年比 0.5 万円増加したことが全体を押し上げた（図表-1）。

図表-1 収入総額とその内訳の推移

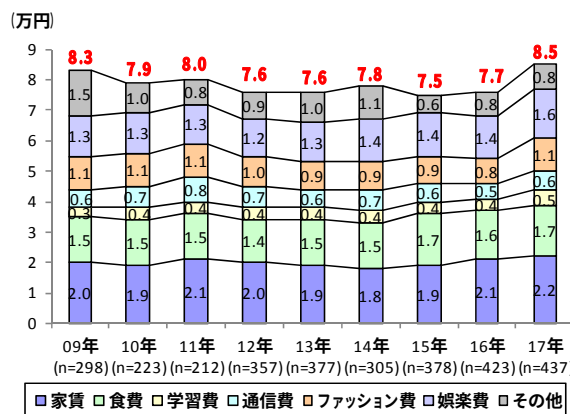


注：赤字は収入総額

（2）支出状況 ～支出総額も過去最高に～

貯蓄を除く月間支出総額の平均は 8.5 万円と、こちらも過去最高となった。昨年と比較すると、ほぼすべての項目で増加しており、なかでもファッション費や娯楽費の増加が目立っている（図表-2）。

図表-2 支出総額の推移

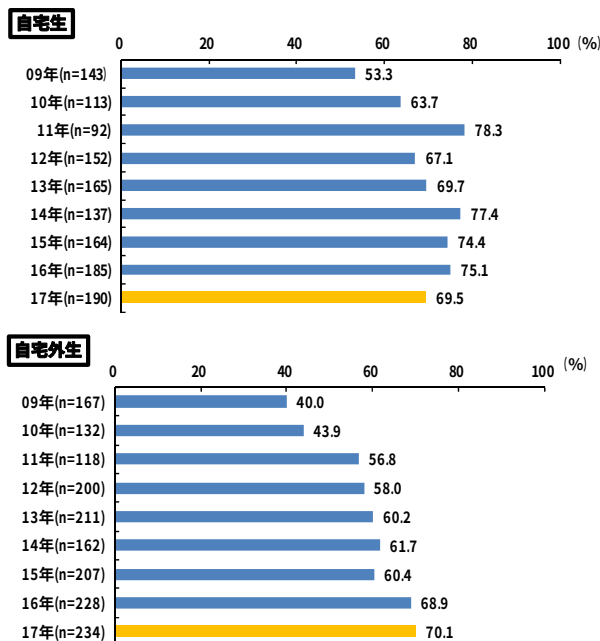


注：赤字は支出総額

月間貯蓄額は 1.8 万円と、前年比 0.3 万円減となった。支出が増加した分貯蓄も減少したようだが、過去からみると高い水準となっている。

「毎月貯蓄している」学生の割合は、自宅生が 69.5%、自宅外生は 70.1%となった。自宅生は昨年を下回ったが、自宅外生は調査開始以来最も割合が高くなった（図表-3）。

図表-3 毎月貯蓄する学生の割合



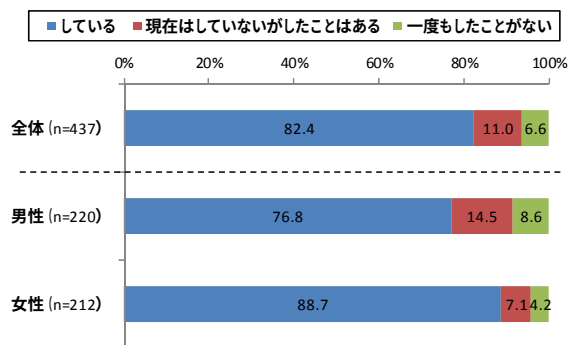
2. 学生のアルバイト事情

(1) アルバイト経験 ～9割が経験あり～

アルバイトをしているかどうかを尋ねたところ、「している」が 82.4%、「現在はしていないがしたことはある」が 11.0%、「一度もしたことがない」が 6.6%と、学生の9割強でアルバイト経験があることが分かった。

男女で比較すると、アルバイトを「している」と答えた割合は、男性（76.8%）よりも女性（88.7%）の方が10ポイント以上高くなった。一方、「一度もしたことがない」と答えたのは女性（4.2%）よりも男性（8.6%）の方が高く、男子学生よりも女子学生のほうが働くことに積極的な様子が見えたと（図表-4）。

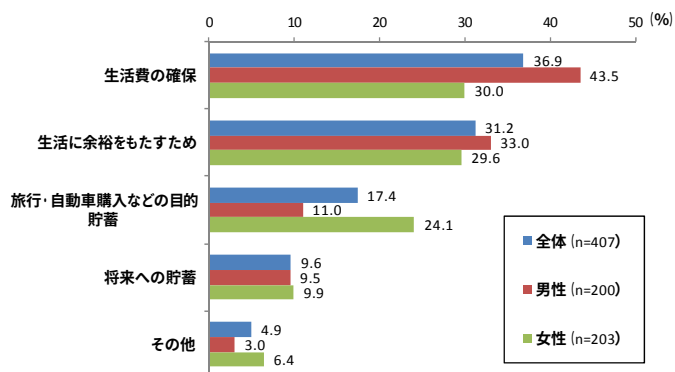
図表-4 アルバイトをしているか



(2) アルバイトをする理由 ～目的貯蓄より生活資金～

アルバイトをする理由を男女で比較すると、「生活費の確保」（男性 43.5%、女性 30.0%）や「生活に余裕をもたすため」（男性 33.0%、女性 29.6%）では男性の割合の方が高くなっているが、「旅行・自動車購入などの目的貯蓄」（男性 11.0%、女性 24.1%）では女性の割合の方が高くなっている（図表-5）。

図表-5 アルバイトをする理由

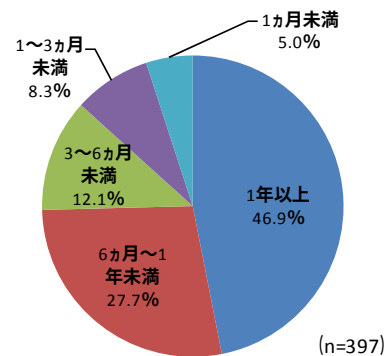


(3) 現在（もしくは直近）のアルバイト実態

A. アルバイト期間 ～半数近くが1年以上続ける～

現在（もしくは直近）のアルバイトをどのくらいの期間続けているか尋ねたところ、半数近くが「1年以上」（46.9%）と答えた。一度始めたアルバイトは比較的長期間続ける傾向があるようだ（図表-6）。

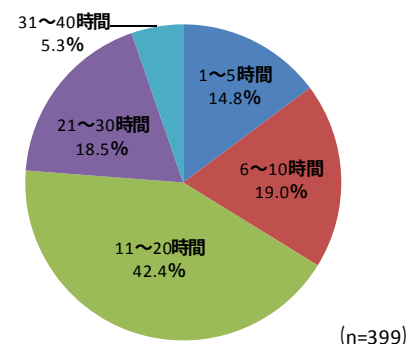
図表-6 アルバイトを続けている（いた）期間



B. 勤務時間 ～1週間に11～20時間が主流～

週に何時間くらい働いているか尋ねると、「11～20時間」が 42.4%と最も多く、次いで「6～10時間」（19.0%）、「21～30時間」（18.5%）がほぼ横並びとなった。「31～40時間」と、労働基準法の上限近くまで働き、学生生活をアルバイトに費やす学生も 5.3%と一定数いるようだ（図表-7）。

図表-7 週に何時間働いている（いた）か

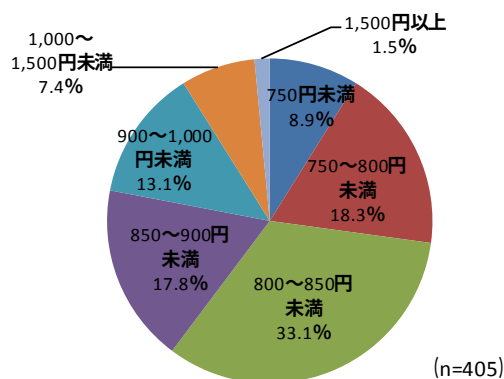


C. 時給 ～750～850円が半数を占める～

現在（もしくは直近）のアルバイトの時給について尋ねたところ、最も多かったのは「800～850円未満」（33.1%）、次いで「750～800円未満」（18.3%）と

なり、750～850 円が半数を占める結果となった。愛媛県の最低賃金は、2016 年 10 月から 717 円になったが、最低賃金に近い「750 円未満」で働く学生も 8.9%と 1 割弱いた（図表- 8）。

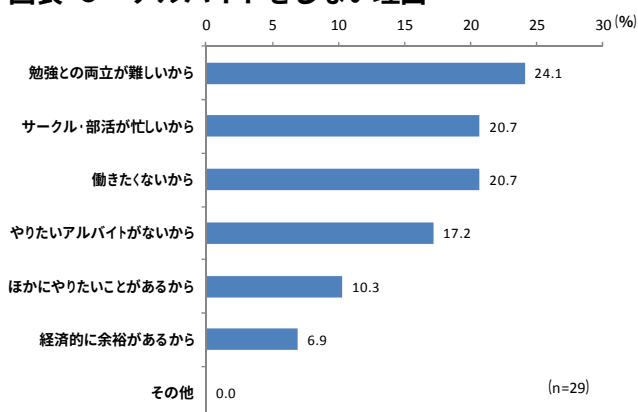
図表- 8 現在（もしくは直近）の時給



（４）アルバイトをしない学生の実情

アルバイトを「一度もしたことがない」と答えた学生は全体ではわずか 6.6%であったが、アルバイトをしない理由で最も多かったのは、「勉強との両立が難しいから」（24.1%）で、「サークル・部活が忙しいから」（20.7%）、「働きたくないから」（20.7%）が続いた（図表- 9）。

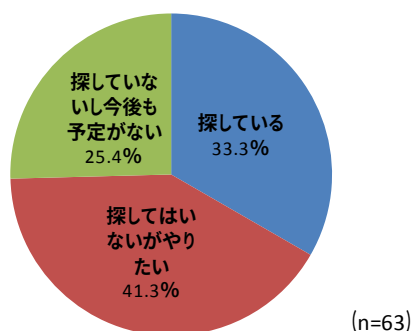
図表- 9 アルバイトをしない理由



アルバイトを「一度もしたことがない」学生に加え、「現在はしていないがしたことはある」学生に、現在アルバイトを探しているかどうか尋ねたところ、「探している」と答えたのが 33.3%、「探してはいないがやり

たい」と答えたのが 41.3%と、現在働いてはいないものの、働く意欲はあるという学生が 7 割を超えた（図表-10）。

図表-10 現在アルバイトを探しているか



おわりに

県内大学生の月間収入総額と支出総額は、ともに調査開始以来最高額となった。自分で使えるお金を自分で稼ぎ、生活費に余裕を持たせたり、ファッションや娯楽費などの支出に回したりする学生が多かった。貯蓄額は昨年と比較すると減少したものの、毎月貯蓄する学生は自宅外生で過去最多となるなど、全体的に、将来のために貯蓄はしつつ、旅行など、自分の楽しみのための支出にも費やす傾向がみられた。

お金を稼ぐ手段として、8 割強の学生がアルバイトをしているが、人間関係や社会のマナーなどを学べる場となっている一方、生活リズムの乱れから学業との両立に悩む学生も多い。労働環境の整備など、雇用者側が改善すべき点もみられる。人手不足が進む昨今、学生と雇用者がお互いに win-win の関係となるような環境づくりがより一層必要だろう。

学生時代は、学業だけでなくさまざまなことを経験し、吸収できる環境に身を置くことができる。学生には、アルバイトと自分の時間をうまく使い分け、より充実した学校生活を送ってほしい。

（加藤 あすか）